

幼馴染のエリート外交官に
カラダから堕とされそうです

目次

幼馴染のエリート外交官に
カラダから堕とされそうです

番外編 初夜

番外編 幸せな時間

番外編 四年後

271

255

239

5

幼馴染のエリート外交官に
カラダから墮とされそうです

プロローグ

この恋は、もう二度と望んではいけないと、叶うわけがないと思っていた。
でも、神様。なんのいたずらでしょう？

恋人に盛大に裏切られたこの日、まさかこんなことが待っているなんて――

「楓……こっち見ろ。誰がこんな顔をさせているのか、ちゃんと見ておけよ」

薄暗いベッドルーム。生まれたままの姿で絡み合うふたり。

いつも余裕たつぶりの、七年ぶりに再会した初恋の幼馴染が、音を立てながら激しく私と繋がったそこを突きこんでいる。

「あつ、んあ……ああっ……」

たまらなく煽情的で、見ていられないくらい淫らなのに、初めて見る奏君の男の顔から目が離せない。

「あんなこと言って煽つたのは君だぞ？　ちゃんと『約束』は守ってくれよな？　もう絶対に、俺から逃がさない」

律動が早まり、瞼の裏にチカチカと火花が散りだす。

奏君は兄の親友で、私のことをそれはそれは大切に扱ってくれたが、妹としてしか見ていないと思っていた。

いや、違う。

あの日、『妹』でもない……私の存在は彼の足枷だったことを知ってしまったのだ。

思わぬ形で彼の本心を知ってしまった私は、もう手を伸ばすことを諦めた。

なのに、こんなの……抗えないよ。

私を抱きしめる奏君をぎゅうつと抱きしめ返しながら、ふたりで快感の極みへと昇り詰めた。

「楓、俺だけを見ている――」

甘美な魔法の言葉が、私の心の扉をこじ開けようとする。

もう、望んではいけないと思っていたのに、まさかこんなことになってしまうなんて……

第一章 再会した初恋の幼馴染と

人間誰しも、夢を持ったことがあるだろう。

将来この職業に就きたいとか、どんな自分になりたいとか、大なり小なり目標を持ったことがあると思う。

かくいう私、木下楓もそうである。

幼い頃に持った輝かしい夢は途中で挫折したけれども、せめて、唯一の家族である兄を安心させるという夢は、叶えたいと思っていた。

幸せな結婚をして、子供を生んで……

それなのに。

「ああっ、あつ、浩太先輩……もつと、奥、奥、突いてえ……」

「はっ、可愛すぎ……もうこんな悦いんじや、楓なんかとできねえよな——」

いったい、私は何を聞かされているんだろう……？

立ち尽くしたまま哑然とする。

商社・竹本商事の繁忙期。四半期決算を終えた三月某日の仕事終わりのことだった。

同僚で交際して三年になる、彼氏の相田浩太と久しぶりにご飯でも行けたらと思つて、私は終業

後、所属する海外事業部から彼のいる営業部に顔を出した。

ところが、彼の姿はない。彼の親しい先輩から浩太が倉庫の方へ向かったと聞いて、私はとりあえず行ってみることにした。けれども、そこにも彼の姿はなく、一見無人のようだった。

あれ？ いない？ なら残念だけど帰ろうかな？ と思つて引き返そうとしたところ、奥の倉庫から子猫のような声とかすかな物音がした。

この声と物音で、探していた浩太が、同じ部署の後輩とナニをしているのかわかつてしまった。

担当する取引先の多くが海外にある彼は、長期の海外出張から帰国したばかり。私の繁忙期や彼の出張も重なり、最後にデートをしたのはもう半年は前だろうか。

それでも社内で顔を合わせれば笑いかけてくれるし、連絡だつて途絶えることなく、結婚をほのめかされていたから期待していたのに……扉の向こう側で今、同じ部署の後輩女子社員に我武者羅に腰を打ち付けている彼がいる。

「はっ、ああ——もう達きそう」

「ああ、だめっ、木下先輩と別れなきや達つちやだめえ……」

「急かすなよ……あいつとのセックスなんて気持ちよくねえし、そろそろ潮時だから——」

甘ったるい声を聞いて、背中が凍りついた。

そんなこと思っていたんだ……

自分でも恐ろしいぐらい冷静になつて身を引いたそのとき、背後にあつた何かに当たつて、カタンと音を立ててしまった。

「誰だ！」

浩太がすかさず動きを止めて反応する。たった今彼女に囁いていた甘ったるい声とは正反対の、威嚇するような声色だ。

好きで遭遇してしまったわけではないのに、なぜ私が声を荒らげなければならないのか。私は心を決めて、目の前の倉庫のドアをゆっくりと開けた。

「か、楓……っ」

浩太はがばっと女子社員から離れ、落ちていた服で濡れた下半身を隠す。

今更そんなことをしても、無駄なのに……

私は大慌てで乱れた衣服を整えている浩太と女子社員を静かに見据えた。

「……もう、潮時でいいよ。会社で堂々とこんなことする人、こっちから願ひ下げだもの……」

全部聞いていた、とその一言で伝わったのだろう。浩太はサーッと顔を青くして、服を身につけながら急いで駆け寄ってくる。

「か、かえでっ——」

「ふたりともお幸せに」

心にもない言葉を吐き捨て、私は扉を閉めて浩太を阻み、その場をあとにした。

浩太の様子を見るに、さっきのセックスの最中の言葉すべてが本心ではないのかもしれないが、そういうことではない。

不快感と失望感と怒りに心が埋め尽くされ、これ以上彼を前にしていることができなかった。

この期に及んで私の名前を呼ぶ浩太の声が聞こえたような気がしたけれど、足を止めることなくまっすぐ駅に向かいタクシーを拾った。

はあ……惨めすぎる。

車窓に映る、今にも泣きそうな顔を見つめた。

垂れ目がちの大きめの二重の目に、高すぎない平凡な鼻。まっすぐなダークブラウンの髪はいつも胸の辺りで切り揃え、ハーフアップにまとめている。

海外企業とのオンライン会議も多いため、服装は常に華やかさと上品さを大切にしている。今日はまだ肌寒さの残る三月の空気に合わせ、淡い色合いのジャケットを羽織り、その下はシフォンブラウスとラベンダー色のAラインスカートで身を飾っていた。

美人には程遠いかもしれないけれど、割と前向きで堂々とした性格のおかげで、人間関係はとも恵まれていると思う。

入社以来、ずっと仲がよかったふたつ上の浩太とは、「明るくてしっかり者のお前が、ずっと好きだった」という彼からの告白で、三年前に交際をスタートすることになった。

つい一週間前の交際三周年記念には、『今後のために、近いうちにお兄さんにご挨拶でも——』なんて、結婚を匂わせるようなメールをしてきて、心配性でちょっぴりシスコン気味の兄・柊兄と柊は、ようやく私に家族が増えることを楽しみにしていた。

そう。私にとって浩太は初めての彼氏で、真剣な交際だった。

なのに、その裏であんなことをしていたなんて。こんなの、悲しさよりも衝撃のほうが強すぎ

る……！

会社からタクシーで十五分ほどの場所にある、アットホームな居酒屋にて。

中身が半分ほどになったビールジョッキをカウンターに叩きつけた私は、カウンターに突っ伏して愚痴をこぼしていた。

「そりゃあ、私にも原因はあるけどさ、さすがにひどすぎる……！ 飲まなきゃやってられないよお」

カウンター越しに和装の叔母・都さん^{みやこ}が、じめじめした私を見兼ねて、客に料理を振舞いながら優しく声をかけてくれた。

「会社で浮気する男なんかより、可愛い楓ちゃんを大事にしてくれる男はいっぱいいるわよ。結婚する前にわかってよかったじゃない。今日はどこん、飲みなさい」

ここ、居酒屋『ひとやすみ』は、人情に厚い安叔父^{やす}さんと、気さくで面倒見のいい都さんが経営する店だ。

金曜日の夜のこの店は、会社帰りのサラリーマンでにぎわっている。

両親を亡くした私にとって、『ひとやすみ』は実家のような場所だ。都さんは母のようでありながらも、なんでも話せる親友のような存在でもある。

邪魔になることはわかっているものの、都さんの優しさに甘え、ここで愚痴を聞いてもらっていた。

さすがに、彼らが会社でセックスしていたとは言えなかったけれど……こんな心境で、兄とふたりで暮らすマンションへ帰れば、兄にすぐにバレしてしまう。

「柊兄になんて言おう。『楓がようやく結婚かぁー！』なんて楽しみにしてくれていたから、きつとガッカリするだろうなあ……そう考えると、言えないよ……」

柊兄は、五歳違いのたったひとりの家族。

大学病院で小児科医をしており、七年前——柊兄が二十五歳、私が二十歳のときに両親を亡くしてから、これまでずっと私を傍で支えてきてくれた。

とても優しく頼れる柊兄だが、昔から妹の私を最優先にして猫可愛がりしてくる……ちよつとシスコン気味なところのある変わり者だ。ぶっちゃけ私は、自分の怒り狂った気持ちよりも、柊兄に知られるほうが心配だった。

「柊君は楓ちゃんの結婚が流れたことよりも、傷ついた楓ちゃんのことを気にすると思うよ？ こんな話を聞いたら、心配するに決まってるわ」

確かにそうだ。優しい都さんの言う通りなのだけれど……

「それが問題なの……」

「ん？」

「ううん、なんでもないよ」

お客様が呼んでいるよ、と話を逸らし、都さんをそちらに促す。

小走りで客席に駆けつける彼女の背中を見送りながら、大きなため息を呑みこんだ。

心配かけるだろうし、都さんにはこの悩みを相談できそうにないなあ……

私たちの両親は、国際協力機関に所属し、国際的な社会活動を支援する仕事をしていた。

柊兄が生まれてからは国内での勤務が多くなったらしいが、それでも頻繁に海外出張に行っていた。

私たちがこのお店に預けられることも、都さんに木下家に来てもらうことも少なくなかった。

両親が亡くなったのは、その支援活動中の不慮の事故だった。

両親を失った当時、私は両親の影響で外交に携わる仕事に就くことを夢見ていて、エリート官僚を数多く輩出する最難関の国立大学に在学していた。

そこで……両親を失った悲しみとともに直面したのは、学費の問題だった。

医師免許を取得して一年ほどだった柊兄が「楓は心配せず勉強しろ」と学費を工面してくれたが、新米の医師が容易にできることではない。国立とはいえさまざまな制度を利用したところで、負担は大きいものだ。結局は、そういった状況への心苦しさや、両親の死のショックで勉強に身が入らないといった理由で、私は大学を中退してしまった。だが、未だに柊兄への感謝の思いは尽きない。さらに言えば、現在は、語学力を活かし大手商社・竹本商事に勤めているが、それも柊兄の友人のツテでの就職だった。いつだって柊兄は、私を一番に考えて、自分を犠牲にして寄り添ってくれた。

なのに、このままでは——大好きな兄にまた我慢を強いてしまうことになる。こういうとき、彼がいたら、聞いてくれるのだろうか……

ふと脳裏によぎった面影を掻き消すように、残り少ないジョッキを呷った。

——ダメダメ！ もう、思い出さないと決めたんだから。

「——まあ、あれだ、楓ちゃん。浮気男よりも、やっぱり『あいつ』しかいねえってことじゃねえのか？」

話を聞いていたらしい安叔父さんが、調理場から一番近い席でひとりになった私を小声で励ましてくれる。昔から口は悪いが人の心の変化にとっても敏感で優しい人なのだ——が、私は口に含んだビールを危うく嘔き出すところだった。

「……っ！」

安叔父さんの言う『あいつ』が誰のことかすぐにわかってしまった。

掻き消した傍から、引つ張り出すのはやめてほしい。

「ははっ……一体何のことやら。それより枝豆追加……」

「何って、忘れたわけじゃないだろう？ あんなに長い間一緒にいたのによ」

慌てて話題を逸らそうとしたが、情に厚い安叔父さんには伝わらない。むしろ、記憶にスコップを入れ、掘り起こそうとしてくる。おかげで空のお皿を差し出した私の手は、浮いたままになった。

「俺は奏一にも楓ちゃんにも、お互いしかいれないと思っていたんだよ。何があったかわからねえが、義兄さんたちが亡くなったくらいからずっと会っていないんだろ？ 外交官なんて将来も収入も安定してるし、この機会にもう一度会ってみてもいいんじゃないかねえのかい？ 何よりあいつといるときの楓ちゃんが、一番楽しそうだったからさ」

いろいろと爆弾を投下されて戸惑う。

安叔父さんに悪気はない。むしろ私を心配してくれているのだ。けれども、癒えない傷跡を針で刺されたような気持ちになり、ぐっと言葉に詰まった。

そんな、こと……

「ふふ、心配ありがとう、安叔父さん。私は大丈夫だから」

だけど、ここは変に否定するよりも、取り繕うのに限る。安叔父さんは、たまに気が利きすぎるというか、お節介を焼くときがあるから、触れられたくないことに関しては、隠してしまうに限るのだ。

「——って強がると思って、その新たな恋の手配はもうしておいたぞ？」

けれども、その瞬間。話が終わる方向に向かつてしまい、私は「へ？」と首を傾げた。

手配……？

「……え？」

何やら、背中がひんやりとしてきたぞ。

「さっき、夜勤に出る直前の柊から、楓ちゃんがこつちに来てないか？ って連絡があったんだよ。楓ちゃんが失恋で心を痛めていると話したら、自分は今から夜勤だから、すぐに“親友”を迎えに行かせるって言ってたんだ。それって、あいつのことだろう？ 一刻も早く来させると伝えておいたぞ」

安叔父さんは「これぞ、復活愛！」なんて決め顔をしながら、刺身包丁で華麗に魚を捌いている

が、私は気が遠のくような気分になった。

——なんてことをしてくれたんだ……そもそも、なんで、終兄に全部言っちゃったの……！ うまく誤魔化すつもりだったのに！ それに、彼が迎えに来る……!!

失恋の痛手なんて、どこかへ吹っ飛んでいつてしまいそうだ。

終兄は、今夜は夜勤のため病院に泊まりこみで、いつもいいと言っても来る迎えに来られない。けれども、どうしてこのタイミングで、こうなってしまうのか。

花吹雪でも出しそうなほど歓喜する安叔父さんを「なんで言っちゃったの！」と責めたい気持ちにもなるが、すべてが安叔父さんのせいではない。確かに余計なことを話してくれたが、彼のことに關しては偶然の不運なのだ。ぐるぐると目を回しながら、こうしてはいられない……と、咄嗟に代金もとい迷惑料を財布から出し、バッグを持って立ち上がったそのとき。さらに困った事態になった。

「……面白い話をしているな。俺と楓がなんだって？」

背後から……お腹の奥に響く、甘くて少しだけ意地悪な声が私の鼓膜を震わせた。

ひゅっと息を呑む。

高すぎず、低すぎず、私の意識をいつも簡単に掻き攫っていくこの声を、私は何年経った今でもしっかり覚えていたらしい。振り向かなくても、声の主がわかってしまった。

視線を声のする背後に向けると、まず視界に飛びこんで来たのは、磨き上げられたピカピカの黒い革靴。それから細身のオーダーメイドの三つ揃いスーツをまとった、スラリとした体軀。ほっそ

りとした顎。それから、高く通った鼻筋に、意思の強さを窺わせる鋭くセクシーなアーモンドアイ。そんな左右均等の甘いマスクに、少し無造作に見える緩く癖のついた黒髪。そんな彼の容貌が、すれ違う誰をも魅了してしまうことを私は知っている。

「奏、君……」

柔らかく微笑まれて、きゅっと胸が痛いほど締め付けられた。

「久しぶりだな。楓」

こみ上げるいろんな感情を押し殺し、「ヒサシブリ」とどうにか笑みを浮かべた。

「聞いていると思うが、柊の代わりに迎えに来た。……ん？ もう、帰る準備できているのか、なら帰るぞ、送っていく」

「えっ……ちよっと」

奏君はそれだけ言うと、早速私の手を引いて安叔父さんに声をかけた。

ここで帰宅準備万端なのが仇^{あだ}となるとは思わなかった。

「叔父さん、お久しぶりです。楓を回収していきますね」

昔から面倒見のいい彼は、柊兄と同じくらい心配性で、結構強引なところがある。でも、今日ばかりはちよっと待ってほしい。心が追い付かない。

「おお！ 来たか、奏一！ やっぱり柊の親友ってお前のことだったか。ちよっと見ないうちに男の色気まで身につけやがって〜」

「まあまあ、芸能人顔負けだわ……」

ミーハーな都さんが、安叔父さんの言葉につられてやってきて、目をハートにして奏君を見上げている。久しぶりの再会に、ふたりはとても嬉しそうだ。

そして、店内のあらゆるところから、奏君は熱っぽい視線を注がれていた。

この人気ぶり、昔から変わらない。

背が高く整った顔立ちの奏君は、どこに行っても視線を集める存在だ。

「そんなことないですよ。今日は楓のことを早く休ませたいので、失礼しますね。後日またゆっくり顔を出しに来ます」

奏君は爽やかに謙遜し、私の肩を抱くと「行こう」と微笑んで、『ひとやすみ』をあとにした。

——なんでこんなことになってしまったのか……。もう、会うつもりはなかったのに……



九条奏一こと奏君は柊兄の親友で、私の初恋の人だった。

彼と最後に会ったのは、彼のフランスへの赴任が決まった七年前。

一歩前に行くスーツに包まれた彼の広い背中を見つめながら、出会った日のことを思い出す。初めて会ったのは幼稚園にいた四歳のとき。

当時、小学校で柊兄と意気投合した彼がうちに遊びに来たのだ。

その整った顔立ちに、幼いながらも見惚れてしまったのをよく覚えている。

品のある佇まいと、優しい笑顔。本当に王子様みたいだった。

でも、王子様だと思ったのは最初だけ。終兄に連れられ頻繁にうちに遊びに来るようになった奏君は、年の離れた私にも名前と呼ばせてくれて、気さくに遊んでくれた。

自信家で意地悪なところもあったけれど、優しく勉強を教えてくれたり、転んで怪我をしたときには丁寧の手当てをしてくれたりして、私が彼に恋するまでにそう時間はかからなかった。

両親にとっても彼は家族同然の存在となっていて、安叔父さんや都さんとも顔を合わせる機会が多く、顔見知りとなった。

そして、当時の私と彼は、同じ方向の夢を抱いていた。

『へえ、楓は外務省で働きたいのか』

小学校高学年の頃。私は、その頃から両親の影響で、日本と海外を繋ぐ仕事に就くことを夢見ていた。

『うん……海外と日本を繋ぐ手助けをしたい。お父さんとお母さんみたいに、日本だけでなく、世界中の人と関わる仕事がしたいんだ』

読んでいた小説の影響もあった。だけど、両親のように国と国を繋ぐという大きな役目にとっても心が惹かれた。

決意をこめて口にした私に、奏君が嬉しそうに提案してくれた。

『なら、俺が家庭教師をしてやる。俺は、親の勧めで外交官を目指すつもりなんだ』

『……そうなの？』

『ああ、俺には難しくないが、楓は心配だから勉強を叩きこんでやる』

『嬉しいけど、言い方……』

この頃、有名な進学校のトップにいた高校生の奏君の進路は、しっかりしていた。

ご両親が大企業の役員で、幼い頃から英才教育を受けていた奏君は、飛び抜けて頭がいいと終兄から聞いている。この手を取らない選択肢はない。

そうして私たちの二人三脚での勉強が始まった。

だけど、歳を重ねるにつれ、私の奏君への思いは苦しくなるほど募っていった。

『奏君が、好き……』

この関係性を壊したくない私は、必死でこの気持ちを隠した。けれども、彼のおかげで大学に合格した十八歳のとき、抑えられない気持ちの口からこぼれてしまった。

言うつもりはなかったし、今思えば黒歴史だ。当時二十三歳で、霞が関で勤務していた彼にとつて、私はただの子供でしかないのに。

『ん？……何か言ったか？』

頭を撫でられ、完全に“幼馴染の妹”としての対応。

聞こえないフリをして、一線を引かれたのだと思った。傍を車が通ったせいと思えなくもないが、そんな都合のいいことはないだろう。

私は、この関係が壊れて二度と会えなくなるくらいなら、思いを秘めて妹として彼の傍にいたいと思った。

この先も“妹”であり続けることを、甘んじて受け入れたのだ。でも、それは間違っていた。

両親が事故で他界し、環境が変わったあの頃。私は、思わぬ形で彼の本心を知ってしまった。『楓のことは……妹だなんて、思っていない。それどころか……正直、今の関係が足枷になっていて、苦しいんだよ』

奏君が、私のいないところで、友人たちに話しているのを聞いてしまった。

“妹”であることが彼の足枷になっていた。彼にとって大切な女性になることも、幼馴染でいることも許されない。優しい奏君は、寄ってくる私を拒めなかったただけなのだ。

だから私は、思い続けることを諦めた。

『楓。俺と一緒に、フランスへ——』

『ごめん。——私は奏君とは行かない。もう大丈夫だから心配しないで。——もう私に構わず、自分のために時間を使って……幸せになってね』

さんざんお世話になったのに、ひどいことをしたと思う。

それでも、私は……差し伸べられた彼の手を拒むことしかできなかった。

◇◇◇

「本当に、久々だな」

奏君は、近くに停めてあった柊兄の大きなSUVに私を乗せると微笑む。車はフランスの自宅にあるらしく、柊兄から借りたようだ。

会わない間に大人の魅力を増した彼は、最後に会ったときの何倍もカッコいい。私は笑顔で平静を装った。

「迎えに来てくれてありがとう。柊兄がいきなりごめんね」

もう、あれから七年。私にとって渡欧する彼を拒んだことは大きな出来事となっているが、彼の記憶にはうつすら残っている程度だろう。あの日、彼は「わかった、じゃあな」と言っ、フランスへと旅立ったのだ。

笑顔で話しかけてくる彼に、戸惑いながらもこれまで通り接した。

「男にフラれて飲んだくれている妹を迎えに行けとは、柊のやつ、相変わらずシスコンだな」「……シスコンじゃなくて心配症ね。奏君は、いつ帰国したの？」

一応、柊兄の威厳を守りながら、彼の動向を尋ねてみる。

「数日前だよ。この春から霞が関に帰ってくるから、その準備のために」
相変わらず気さくな彼に安堵する一方で、鼓動が一気に加速する。

——奏君が日本に帰ってくる。

夢を叶えた奏君は現在、キャリア外交官として働いている。

数年おきに海外の在外公館勤務と日本の外務省本部勤務を繰り返すのだが、二年間の在外研修とフランス総領事館での五年間の勤務を終えた彼の拠点は、四月からこちらになるようだ。

通常なら在外勤務は三年ほどだと聞くけれど、奏君の場合はフランス総領事館の重要ポストを任されたらしく、その任期が延びたのだという。彼の堅実な性格と語学力を思えば、納得がいく。

「……また世話になるだろうが、よろしく」

関係を築こうとするような口ぶりに激しく戸惑う。

七年前、確かに私は彼を拒んだが、その後一切私たちは会うことも連絡を取り合うこともなかった。取ろうと思えば取ることだってできたのに。

それがやはり奏君の本音で、私のしたことは間違っていなかったと思ったのだが……

「はは、もしかして、またうちでご飯食べようとしてる？」

きつと、本気なわけがないよね？

「楓の作る料理、うまいからな。まあ、おばさんには敵わないが」

……どういうわけか、本気のような。動揺しそうになったがどうにか堪えた。

「そう言いながら何回もおかわりしてたくせに……」

私が口を尖らせてみせると、奏君は昔みたいに人懐っこい顔でケラケラと笑った。

海外をあちこち訪れていた母の作る料理は、さまざまな国の料理を味わってきただけあって、お世辞を抜きにしても美味しかった。亡くなってからは私が料理を担当しているが、やはり母の味は越えられない。

奏君はよく、私の料理を食べて今みたいなやり取りをしたあとに、結局は「嘘、嘘。世界一うまいよ」と甘やかすように、からかうように言っていた。そう……奏君は、本当に優しいのだ。

「——でも、よかったよ……元氣そうで」

彼の考えていることがわからなくて、複雑な気持ちになっていると、奏君は車を走らせながら突然そんなことを言う。

「え？」

目を瞬かせた。

「……彼氏と別れたんだろう？」

ハッとした。浩太には悪いが、浩太との破局は奏君との再会という衝撃により、すっかり頭の片隅に追いやられていた。もちろん、許せないし怒りや悔しさはこみ上げてくるが、不思議と気が滅入るほどは悲しんでいないのだ。三年も交際したのにひどい女だと思われるかもしれないが、あんな乱れきった場面に遭遇してしまっただけに、浩太から心がスッと離れたのを感じている。それより心配なのは――

「別れたよ。確かに別れたけど、今は、柊兄のこのほうが心配になってるかも……」

「柊？」

奏君なら、いい助言をくれるかもしれない。

本音を言えば、ずっと彼に相談できたらいいのについて思っていた。

車はいつの間にか私と柊兄の住むマンションの近くのパーキングに停車していて、奏君は真剣な眼差しを向けて聞いてくれていた。

私は、心配そうに私を見る奏君に、このところずっと悩んでいたことを打ち明けた。

「柊兄、私には言ってくれないけれど、彼女いるよね？ その……盗み聞きするつもりはなかったんだけど、たまたま聞いちゃって——」

奏君は綺麗な目を大きく見開く。

彼女の存在に気づいたのは、まだ両親が生きていた頃だろうか。

見るつもりはなかったのだが、たまたま柊兄の後ろを通ったとき、デートの約束をしている初々しいメッセージが見えてしまった。

身内贗肩をするわけではないけれど、ひょうきんで物腰が柔らかく、整った顔立ちの柊兄は昔から女性にモテていた。ただ、誠実で真面目な性格で、両親が海外へ行く際に私の面倒を任されていたこともあり、恋人や女性の影はまったくなかった。だから驚いたものの、それ以上に柊兄にとって大切な人が増えたことが本当に嬉しかった。今でもよくバルコニーで楽しみに電話をしながら、順調に続いているようだ。

けれども、一週間前に偶然聞いてしまった。

『結婚は、もう少し待ってほしい』

夕飯ができたとき声をかけようとした私の動きは、ピタリと止まった。

『楓をどうしてもひとりにしたくないんだ。悪いけどこれは俺のワガママ。とはいっても、そう遠くないうちに結婚するかもしれないと報告を受けたんだ。そしたら俺たちも——』

交際三周年記念で、浩太が挨拶を匂わせていたことを伝えてすぐ、そんな嬉しそうな電話を聞いてしまったのだ。

「それを聞いて、柊兄は私が結婚して家を出るのを待っているんだって、気づいたの。……私、柊兄には早く幸せになってもらいたい。だからできれば、別れたことは知らせないで、うまくやり過ごせたらなあと思っていたの。少なからず気落ちしてしまうだろうし……安叔父さんが言っちゃったとは聞いたけれど、どうにかできないかなあって思ってる」

静まり返る車内に、私の声が響く。

柊兄は心配だと言って、ひとり暮らしを許してくれない。結婚や同棲を理由にしなければ、家を出ることは叶わないだろう。そして、柊兄にこの気持ちを打ち明けたところで、「楓はそんなこと気にするな」と流されてしまうのもわかっている。

だから、無茶かもしれないが、安叔父さんが伝えてしまった情報を訂正したいと思っているし、どうかこの流れのまま柊兄を結婚させてあげたい。嘘をつくのは心苦しいけれど、破局は叔父さんの早とちりで彼氏と同棲をすると偽って家を出よう。できるかはわからないけど、柊兄にバレル前に早急に結婚を前提にお付き合いしてくれる人を探せばいい。

そろそろ柊兄には自分自身のことを優先して、幸せになってもらいたい。

「楓は本当に、お人よしだな」

長い私の話を聞いてくれた奏君は、私の頭を優しくポンポンした。

彼の手がとても懐かしく、胸がきゅつと詰まるような気持ちになる。

「そんなことないよ……」

誰よりも柊兄を知る奏君なら、いい解決案を出してくれるような気がした。だから、打ち明けた

だけだ。

「とにかく話はわかった……つまり、楓は早く自分が結婚して、柊にも結婚して幸せになってほしいんだな？」

早く言えばそういうことになる。ひとまず私はコクリと頷いた。奏君が話を合わせてくれるなら、嘘をついてひとり暮らしすることもできそうだが、なんとなく協力してくれない気がする。小さいときから私の世話を焼いてくれた彼も、とても心配性だった。でも、なんとか彼氏と同棲するということにして柊兄と住むマンションを出れば、柊兄は何の心配もなく結婚ができるはずだ。

「——なら、俺と結婚しよう」

「……………へ？」

またまた、思考が停止した。

続いて気が遠のくような気分になった。

口を開けたままポカンとしていると、奏君は説得をするように続ける。

「別れたなら新しい相手が必要だろう？　なら俺にすればいい。俺なら気心が知れてるし、楓のことを誰よりも大事にできる。柊だつて俺になら安心して君を託してくれるだろう。以前の交際相手から俺が君を略奪したと言えば、自然だ」

聞き間違いではなかった。それどころかおかしい事態になった。

「いや、ぜんぜん自然じゃないよね……？」

「柊なら絶対に納得する」

「いやいや絶対にしないって……」

っていうか、私が納得できない。

「俺以上に適任はいない」

キッパリ言い切る奏君を唾然として見つめる。決意は固いようで、私の戸惑う言葉なんてぜんぜん聞いちゃいない。こうなってしまうと、彼が自分の意見を曲げないことを私は知っている。

「奏君、結婚って好きな人とするんだよ？」

「そんなの当たり前だろう」

「私のこと、好きなの……？」

「じゃなきゃ、言うわけがない」

きちんと考え直すように促したつもりだが、すべて冷静に即答されて大きく息を呑む。

奏君の眼差しはとても真剣だ。

会わなかった七年の間に何かあったのだろうか？　私のいないところで、あんなことを言っていたのに……一体何がどうしてこうなったの!?

だけど、浩太とああなつてしまった以上、新しい出会いを求めなければならないのは、本当のことでもある。彼は柊兄の信頼できる親友で、幼馴染であるからこそ誰よりも私のことを理解しているし、常々大事にしてくれたことも覚えてる。さらには、ルックスとスペックに至っては私にはもったいないほど最上級だし……叶わないと思っていた初恋の相手だ。私の恋心に気づいていた柊兄なら、絶対に突っぱねたりはしないだろう。

そして、私自身……今も同じ気持ちかと聞かれると答えに困るが、嫌ではないなんて思っ
まっている……

そう。悪い話ではないと思うけれど――

それでも、苦しくて苦しくて、これ以上奏君の負担になりたくなくて、七年前に彼を拒んだ
に……頭が追いつかない。

「楓……」

奏君の左手が、私の頬にそっと触れた。そして、視線を絡めたまま続けた。

「君がなぜ、俺の言葉をそんなに疑うかはわからないが……俺は、楓以上に大切なものなんてない。
離れていた間もずっと君だけを思いながら過ごしてきたし、君を誰より幸せにすると誓おう。俺を
選んで絶対に後悔はさせない――大人しく受け入れろ」

情熱的な告白に、心がふるりと震える。

まっすぐに私を見つめる、奏君の色素の薄い瞳。そこからは強い輝きが放たれている。

この七年の間で彼にどんな心境の変化があったかはわからない。そもそも、彼のこの提案がどん
な感情から来ているかもわからない。恋愛なものなのか、親きょうだいに對する親愛的なものな
のか。もしくは、どちらでもないのか。

だけど、七年前に聞いたあの言葉は、何かの間違いだったのだろうか……？

そう思えるほどに、自分でもうまく説明できない本能的な部分から、彼が嘘偽りなく口にしてい
ることが伝わってくる。

そんな風に見つめられたら……

「……でも、奏君の気持ちは嬉しいけど、やっぱり無理だよ」

了承の言葉が喉元まで出かったその瞬間、もうひとつ重大な問題があることに気づいた。

「どうしてだ？」

私は、重い口を開いた。

「……さつき、私とセックスしても『悦^よくない』って言われた」

「……は？」

突拍子もない告白に、奏君の表情が一気に強張った。

初めて見る表情に少しだけ躊躇したけれども、真剣に私を助けてくれようとする彼に、きちんと
伝えなければと思った。

「私、あんまり濡れない体質みたいで……私自身も体を重ねることが気持ちいいと思えなかったの。
そしたら、相手もやっぱり悦^よくなかったみたいで……今日、会いに行ったら他の子と夢中になっ
てた……」

思い出すのが辛くてうまく言葉を紡げない。それでも、勘のいい彼はこれが破局した理由である
と察してくれただろう。彼の眉根が苦しそうに寄せられている。

「奏君の提案はありがたいよ。でも、結婚したらやっぱりそういうこともするだろうし……気持ち
はとても嬉しいけれど、それ以上に、嫌われたら嫌だ^なって思っちゃった……」

七年前、彼を拒んだのはこれ以上彼の負担にならない気持ちと、嫌われて突き放されること

への恐怖があったからだ。奏君に浩太と同じような形で突き放されたら、私は今度こそ立ち直れないだろう。口にしているうちに涙が滲みそうになる。

「はあ……！」

だけど、理由を聞くやいなや、奏君は大きく息を吐いた。そして、両手で頭を抱えて顔を伏せる。「ど、どうしたの？」

いきなりの行動に、ビックリして奏君を見つめる。

「君のそれは無自覚か……？　だとしたら本当にたちが悪い」

「へ？」

いったい何のことを言っているのだろうか？

首を傾げたが、奏君は「いや、なんでもない」と言う。そしてまた大きく息をついたあと、気を取り直したように話を戻した。

「とりあえず、楓はとんでもないクズ男に引つかかっていたというのがわかった。——だが、そんなこと真に受ける必要はない。楓のせいではないだろう」

奏君は私の頭に手のひらを乗せると、優しい口調で言った。

「奏君……」

「悦く思えないのは、君がオーガズムに達しないからだろう？　自己本位のセックスをして女性のせいにする男なんて相手にする必要はない。そんな男に楓はもったいないし、渡せるか！」

あけすけなワードに頬が熱くなるのを感じながらも、心の傷を労わるような温かい言葉にふわっ

と涙腺が緩みそうになった。

私を見つめる眼差しは、これ以上なく優しい。そしてどこことなく熱を孕んでいるように感じる。そんな風に見つめられたら、勘違いしてしまいそうになる。

「……俺なら、絶対に楓を傷つけたりはしない。問題があるならふたりで解決したいし、ひとりで悩ませたりしない。ベッドの上でだって、君を何も考えられないくらいに蕩かして、俺しか見られないように甘やかしてやる……」

誘惑するような響きに、お腹の奥にじわりと熱を持つような感覚が走った。

変わらない優しさと包容力の嵐に、胸の奥が熱くなる。

彼は昔から変わらない。勘違いしてしまいそうなほど甘く魅惑的な言葉で私を翻弄するのに、肝心な心の内は見せてくれない。七年前に彼の本心を聞いてしまったはずなのに、また懲りもせずその沼の中に引きこまれそうになる。

そして、あまりにも熱心に言い聞かされるものだから、想像してしまった。

いつも私の頭を優しく撫でてくれる奏君の骨ばった大きな手が、私の全身に触れて……心と体を翻弄していく様を。

ズクン……と熱くなったお腹の奥から、とろりと何かがあふれるような感覚が走る。

やだ、これ……

初めての感覚に戸惑って、きゅう……つと膝を擦り合わせていると、奏君が緩く口角を上げた。

「——楓、試してみないか？」

長く骨ばった指が私の顎先に触れ、猫の機嫌を取るように掬い上げる。

「試す……？」

「俺とのセックスで気持ちいいと思えたら、結婚しよう」

あからさまに説明され、全身が沸騰するように熱くなった。

——セッ……!?

うまく声を発することができなかった。ぶっ飛びすぎた提案に、卒倒してしまいそうだ。

奏君はそんな私を見つめながら続ける。

「俺はこの先どんな楓を見ても幻滅したりしないし、むしろ愛おしいと思う。何より俺には、楓をベッドでグズグズに可愛がつてやれる自信がある」

彼の形のいい薄い唇が今度は妖しく弧を描くのを見て、ゾクゾクした。

「……試してみる価値は、あると思わないか？」

奏君の真摯な眼差しが、私の心の真ん中を射抜いていく。

……自信家な彼の、突拍子もない提案だと思う。普通なら「冗談でしょ？」と本気が疑うレベルだろう。でも、こうして真剣に考えてしまうのは、今まで彼の言うことになにひとつ嘘がなかったからだ。

小学校のかけっこで一等賞を取ったらハグしてくれるという約束も、苦手な数学のテストで満点を取ったらクレープを食べに連れていってくれるという約束も。どれもこれも、奏君のことが大好きだった私のささやかなお願いだった。けれど、奏君はどんなにバカげた約束でも無下にせずに、

ぜんぶぜんぶ守ってくれた。

七年前、彼の本心を聞くまで、私はたくさん彼に甘えていたと思う。

こんなの、よくないってわかってるのに……

固く閉ざされていた心を、説明のつかない何かが、まっすぐに熱い言葉とともにするりと解きほぐしていくのを感じた。

頬にあった奏君の手が、答えを催促するように私の唇にするりと触れる。しばらく見つめ合ったあと、私は小さく頷いた。

「……わかった。奏君の提案を……その、受けることにする。その代わり、私がダメだったとしても、嫌いにならないでくれる……？」

おそろおそろ確認する私を見て、奏君は花が綻ぶように笑った。

「なるわけないだろう。大丈夫、約束だ。俺にすべて委ねろ——」

人形みたいに綺麗な奏君の顔がゆっくりと近づいてきて、そっと唇同士が合わせられる。

唇が触れ合うだけで、心が震えたような気がした。まるで初めてキスをしたみたいに、甘くむせ返るような心地が胸を占める。

「……俺の部屋に行こう。ゆっくり可愛がりたい」

意思を確認し合うように何度か口づけたあと、奏君が耳元で囁く。また、ズクン……とお腹の奥が熱くなる気配がした。

なんだか、体がいつもと違う……

私が真っ赤な顔で頷くと、奏君は車のギアを入れ替え、彼の都内の住まいへ車を走らせた。

◇◇◇

「楓……」

十五分ほどで元麻布^{もとあさぶ}にある奏君のマンションに到着した。奏君はまっすぐ寝室に向かい、大きなベッドに私をそっと導いた。

数日前に鍵を受け取ったばかりというホテルのスイートルームみたいな部屋は、段ボール箱が積み重なり、生活に必要な最低限のものしか出ていない。そんな空間で体を重ねることに気おくれたが、奏君が私の名前を呼びながら覆い被さりキスを始めると、そんな考えはなくなった。

「そう、くん……」

彼の優しい香りと温もりが触れるだけで、不思議と強張っていた体から力が抜けるのを感じた。

「何も考えなくていい。俺から目を逸らさずに、俺だけを感じていろ」

奏君は私を見下ろすように膝立ちで跨がり、薄暗い部屋の中でネクタイを解いてスーツの上着とベストをバサリと床に投げ捨てた。シャツのボタンを緩めながら再び口づけをし、わずかにあった不安さえも舌で絡め取っていく。

舌がじゃれ合って、ぴちゃぴちゃと生々しい音が響く。絡まり合って、吸い上げられるとお腹の奥が熱くなって、またとろりとこぼれるような心地を覚えた。

やっぱり、いつもと違う……キスが、気持ちいい。

私をこのまま食べてしまいたいそうなほどねっとり甘くて……触れられてもいない部分が疼くように温度を上げていくのがわかる。そうして、滑らかな舌の動きに翻弄されていると、私のブラウスのボタンが外され、胸元に外気が触れる気配がした。

「背中浮かせて」

「あ……」

言われた通りにした途端、ブラウスが腕からずりりと脱がされ、下着があらわになる。さらに、見えていく素肌にキスを落しながら、奏君は私のスカートとストッキングも丁寧に脱がしていった。

ブラとショーツだけになった私を、奏君が真上から見下ろし、呟く。

「綺麗だな……」

どこか熱の籠った視線に戸惑い、それとなく腕をクロスさせ胸元を隠した。

「そんなに、見ないで……」

ラベンダー色の上下セットの下着は、レースがふんだんに使われ自分でもお気に入りだ。たまたま今日この下着だったのは幸運だが、まさかこんなことになるとは思ってもみなかった。

「こんなに可愛い楓を見逃すわけないだろう……どうせ今から隅々まで暴くんだから、隠すな」

奏君は意地悪な顔でそう言うと、私の両腕を開いてショーツに押し付ける。それから背中を手を回しブラのホックを外すと、ふるとこぼれ落ちた胸を両手でキャッチし、優しい力加減で揉みしだ

き出した。

「ああ……あつ、待つて……」

着々と事が進んでしまい、頭が追い付かない……あまり大きくはない私の胸が、奏君の大きな手のひらに収まり、淫靡に形を変えている。包むように触れたり、いやらしく押しつぶしたり、こんな風に念入りに触れられるのは初めてだった。

「こども……早く、触れてほしいそうだな」

奏君はひとしきり柔らかさを確かめたあと、いつしか中央でふつくりと反応していた桃色の突起に顔を寄せた。

「あつ、んう……」

ツンと舌尖で突かれたあと、指の腹ですりすりとおしく撫でられる。まるで羽根が触れるような感触がもどかしくて、背中が意図せず反ってしまう。

「あ、あつ、くすぐった……」

「気持ちいいんだよ」

奏君はべろりと舐めて告げたあと、突起を熱い口内に含んでちゅうつと吸い上げた。

びくつ、びくつ、と舌の動きに合わせて弾む体。

初めてではないのに、体感するものがいつもと違いすぎる。その波に困惑して心を落ち着ける時間が欲しいと思ったが、奏君は容赦がない。

吸い上げた先端を舌で転がし、わざとらしく歯を当てながらむしゃぶりつく。反対側の乳房も、

突起を指で転がしながらしつこく可愛がられて、私は体を振りながら甘い声で悶えた。

「ああ、だ、め……なんかおかしい……っ」

キャパオーバーとは、このことだろう。どうしたらいいのかわからない。刺激を与えられるたびに、全身を甘く震わす媚薬のようなものが浸透してゆき、しだいに触れていない下腹部が疼いて熱を持ち始めた。初めてのことに呼吸もままならない。

「もう、これだけでわかるだろう？ 楓はちゃんと『悦』になれる」体だ。相手が自己本位だっただけで、楓にはなんの落ち度もない」

「そう、くん……」

思わずうつと、目頭が熱くなる。

浩太との経験しかないが、今までたいして愛撫がないまま挿入されて、苦痛で早く終わってほしいと願うばかりだった。

だけど、今は違う……

温かい手で、唇で、手のひらで。蕩けるような愛撫を執拗に繰り返されている。余裕のなくなってきた私をうつとり見ながら、奏君が胸の引っかかりを優しく取り除いてくれた。

「まあ、相手がバカな男で俺は命拾いしたかな」

よく聞こえなくて「え？」と首を傾げたが、奏君は微笑んで私の眼をじっと見つめ尋ねてくる。「——で？ このあと、どこに触れてほしい？」

熱く欲を秘めた瞳が私を捉え、お腹の奥が震えた。

意地悪なのに甘くて、まるで誘惑するような言葉。

私は、顔が熱くなるのを感じながら、正直にお願いした。

「もっとその、触って……ほしい」

胸だけじゃなく……下も……

ごによごによと真つ赤になりながら呟くと、

「よく言えました」

そう嬉しそうに言った奏君はご褒美にキスをくれ、ショーツの上からクロッチの部分に触れた。

「あ……」

くちゅ、と粘着質な音がする。

「すぐ濡れてる」

奏君は指先で上下に滑らせながら耳元で囁く。湿ったクロッチで、さらにあふれてくる蜜をくちゅくちゅ練って弄ばれた。

「んう、こんなの、初めてで……」

俗に言うテクニクというもののなか、相性というもののなか、経験の浅い私にはわからないが……奏君に触れると、そこからアイスのように溶けてしまいそうだ。

ソコを撫でまわす指使いにいつぱいいつぱいになりながら口にする、奏君は上半身を起こして私の腰をぐいっと引き寄せた。

「当たり前だ……他の男とは年季が違うんだ」

年季？ と疑問に思ったが、口にする間がなかった。

「ひああ!？」

ショーツを引きずり下ろされて、太腿を割り開かれた。

「な、なに——」

やだ、丸見え……っ。

「大丈夫だから身を委ねろ」

奏君はそう言っただけで私をなだめると、脱がしたショーツをぽいつとベッドの下に落とし、開いた足を天井に向けて大きく広げる。そして、私を見て意地悪に微笑むと丸見えになった足の間のソコに顔を近づけた。

「っ、だめえ……」

知識として知ってはいるけれど、されるのは初めてだ。恥ずかしすぎる光景にきゅうつと目を閉じてしまう。だけど、所詮奏君に勝てるわけもなく。

「あつ、あつ……んう——」

彼の舌がにゅるりと秘部に触れた。音を立てて舐め始める。

上から下に蜜を拭うように念入りに舌を這わせ、縁どるように花弁を舌でなぞられた。熱い舌の感触に脳が陶酔し、腰がカクカクと震えた。

「ああ、ダメっ、なの……」

眩暈めまいを起こすような甘美な刺激に、無意識にいやいやと頭が横に揺れる。どうしようもなく気持ち

ちがいい……

「ダメと言っても、蜜を垂らして誘っているな」

意地悪な言葉に羞恥したそのとき、蜜の入口を念入りになぞっていた舌が、ぐぐつとナカに挿^はつてきた。

「ふあつ!? あ、ああつ……そう、くん……っ」

一瞬何が起きたのか理解が追いつかなかった。ずぶつ、ずぶつと舌を押し入れられて、あふれた蜜を音を立てて吸い上げられた。頭の芯がとろりと蕩け、体の奥からさらにあふれてくるのを感じる。そのまま、また舌を押しこまれて、ナカをしつこく蹂躪^{じゅうりん}された。

「ああ……だめ、どんどん、なんか——」

下腹部に切羽詰まったような、何かが押し寄せてきた。

「悦さそうだな」

ふちゅつと秘部から彼の唇が離れ、独り言が耳に届く。それと同時に、蜜口を開いていた指が入口をそつと上下になぞったあと、ゆつくりナカに挿^はつてきた。

「ふあつ、ああ……」

内壁を擦られる感覚に、体中の血液が騒めいた。長い指がずつぷり付け根まで埋められると、お腹の奥からずくずくとナカ力が湧き立つのを感じる。

「すごい、ところ……」

そのまま奏君の長くて綺麗な指が、ナカを擦り上げる。はじめは優しく撫でるように、じきに搔

き混ぜて弱点を探るように。指が二本に増えると、お腹への圧迫感が増した。

「ああつ、はあ……なんか、へんに、なる……」

何か、大きくて、弾けそうな、巨大なものが押し寄せてくる。味わったことのない不思議な衝動に怖くなった。

「大丈夫だから、安心して達け」

奏君は腕に縋^{すが}りつく私の唇を優しく食^はむと、安心させるよう抱きしめ、くちゅくちゅとナカの指の動きを早めた。お腹の奥を搔きむしられるような、不思議な快楽に自然と足を広げてしまう。甘えるような声を上げて、シーツを蹴^けりながら悶えた。

トントンと一番奥をノックしながら優しく擦り上げられて——

「ふああああ……!!」

ビクン! と体中に電流が走ったような甘い衝撃が行き渡り、体が大きく反り返った。頭の中が真っ白になり、恍惚とする。

「はあ、はあ……」

全身の力が抜けてくつたりした。

脱力した体を労わるように、奏君がしつかり抱きしめてくれた。

「達ったな、可愛い」

……とてつもなく大きくて、弾けるような快感だった。

達くつて、このことなんだ。初めてで、ビックリした……

こくと頷くと、奏君は満足げに微笑み上半身を起こした。

「でも、まだ終わりじゃないぞ？」

奏君はそう言って、着ていたシャツとスラックスを脱いでベッドの下に落とした。

あらわになっていく体から、目が離せなかった。

彼は昔から忙しい合間を縫ってランニングやジムで体を鍛えていたのだが、今もそれは変わらないようだ。逞しい胸板としつかり割れた腹筋、まるで彫刻のような裸体にうっとり見惚れてしまう眉目秀麗な上に、こんな体をしているなんて、本当にずるいと思う。

彼がボクサーパンツを脱ぎ捨てると、腹筋のその下の……すでに臨戦態勢になった大きな彼のモノがぶるんと飛び出てきて、思わず目を剥いた。

血管を浮き立たせた天井を向くソレは、私を知るよりも大きくて立派で……無意識に喉が鳴る。

奏君はここに来る途中にドラッグストアで買った避妊具を装着して、私の腰を抱えた。

「挿れるよ」

頷くと、グズグズに蕩けた蜜口に熱くて硬いものがあてがわれる。そして、ゆっくりと押し進められた。

「ああ、んう……」

ズブズブ……と内壁を掻き分け、硬くて大きな熱の塊がナカに挿ってきた。

苦しいくらいに圧迫感を感じる。けれども、柔らかくほぐれた内壁は、頬張るように嬉々として彼の欲望を難なく飲みこんでいく。

ぜんぜん、痛くない。それどころか……苦しいのに切なくて甘い。もっともっとと体の奥で何かが走り出す。

「痛くないか？ 少しキツイな……」

根元まで挿れて体がピタリくっつくと、奏君は私を抱きしめて頭のでっぺんにキスをした。なんだかその表情がとても苦しそうに見えた。

「だい、じょうぶ……奏君のほうが」

言いかけると、奏君は困ったようにため息をついた。

「いや、俺は……悦すぎて、保てるか心配になっていただけだ」

彼は口角を上げると、「動くぞ」と言って、腰を引いてゆっくり動き出した。

「あ、あつ、あ……」

二度、三度、馴染ませるように動いたあと、彼は本能に突き動かされるように私のナカを抉り出した。

はじめは蜜窟を押し広げるように。しだいに雄芯が抜けるギリギリまで腰を引き、新しく生まれた愛液をまよって柔壁を突き上げる。ズン！ズン！と腰を穿たれるたびに、頭の中で火花が散り、自分のものとは思えないほどの甘い嬌声がこぼれた。

「ああ……んあつ！ あつ、ああ……」

昔から余裕たっぷり、私を意地悪に翻弄する奏君が、初めて見る男の顔で夢中で腰を打ち付けてくる。たまらなく扇情的で、あんなにセックスに悩んでいたのが嘘のように、私は奏君に縋りつ

いて喘いだ。

「そんなに食い締めると、俺がもたないぞ……」

私を見下ろして、奏君の目が意地悪く細まった。

「ひゃあん！」

膝が胸に付くほど太腿を大きく広げて持ち上げられ、腰を穿たれる。ぐぐつと、子宮が持ち上げられるのを感じ、くらりと眩暈がした。

これ……深いっ。

じゅぷ、じゅぷ、と蜜を掻き出しながら出し入れをされて、脳芯を震わせるような刺激が全身にもたらされる。逃げようにも、全身で圧しかかられ身動きが取れない。何度も繰り返されているうちに、さっき感じた大きな波がお腹の奥からせり上がってくる気配がした。

だめっ、これ……っ。

「楓、顔が蕩けてる……」

奏君が、膝の間で無防備に揺れていた両乳首を摘まんで、指で転がした。

「ああっ、んあ……またっ、きちゃあ……っ」

「遠慮せずに達け、ふたりで悦くなるのがセックスだ」

私のナカを抉るスピードが加速し、肌と蜜の触れ合う音が大きくなる。

熱い塊でナカを犯しながら、乳首を無遠慮に捏ね回される。

意識が遠のきそうなほどの気持ちよさに、しだいに目の前でパチパチと光が爆ぜるようになった。

「ああああっ……！」

お腹の奥から押し上がってきた熱いものが決壊し、全身を巨大な快楽に包みこまれる。胎内がぎゅうぎゅう収縮して、痙攣するのを感じた。

「まだ、意識飛ばすなよっ……」

だけど、奏君の動きは止まってくれない。

「ふあ!? あああつ! やあつ、とまってえ……っ」

達った。達ったのに……! おかしく、なっちゃう……!

奏君は、逃げようとする私の腰を押さえつけては、さっきよりも熱くなった雄芯を容赦なく突きこんでくる。

「俺ももう出る……もう少し頑張れ」

懇願する私に、彼がサディスティックに微笑む。また、ぎゅんと下腹部が熱くなるのを感じた。

「んあ、あつ、でもっ——ひゃっ!」

奏君は激しく腰を打ち付けたまま足の間に手を伸ばし、まだ達ったばかりの肥大した花芽を、親指でコリコリと刺激する。

「楓——ちゃんと“約束”は守ってくれよな? もう絶対に、俺から逃がさない」

もう何も、考えられない……

私は再び胎内を大きく痙攣させ、ひと際甘い嬌声を上げた。

同時にナカの奏君が、熱いモノを吐き出すのを感じる。

温かくて、心地よくて、言いようのない充実感が私の心を満たした。

「俺だけを見ていろ——」

遠のいていく意識の中で、そう聞こえてきた。

——もう、望んではいけないと思っていたのに……どうして私の前に現れて、こんなことをするの……

甘美な魔法の言葉が、私の心の扉をこじ開けようとする。

彼の気持ちが理解できないまま、優しい腕に包まれ私は意識を手放した。

第二章 絶対に逃がさない Side 奏一

荒ぶる呼吸を整え、汗ばんだ柔らかな体を隙間なく抱きしめる。

腕の中で意識を手放した彼女の頬に、何度も口づけた。

——……やっと、ここまで来られた。

素っ裸で縋るように彼女を抱きしめる俺は、なんとも滑稽かもしれないが、それほど感慨深いのだ。

……人間誰しも、後悔というものをしたことがあるだろう。

九条奏一にとっては、目の前の木下楓こそが、後悔の象徴だった。

七年前に砕け散った恋をどうしても諦めきれない俺は、この好機をどうしても逃すわけにはいかなかった。

「……楓、もう絶対に逃がしてやらないからな」

腕の中で眠る彼女を見つめながら、出会った頃を思い出した。



楓に出会ったのは、彼女が幼稚園に入園したての頃。当時、俺は九歳だった。大企業の取締役を親に持つ俺は、とても裕福だったが、寂しい思いをして育ったのをよく覚えてる。

世話役の家政婦がいたが、両親が仕事でほとんどいない広い家は、温かみがなくもの寂しかった。小学校低学年の頃は下校時間が近づくたびに、心で何度もため息をついて事務的な家政婦しかない家に帰る心の準備をしていた。

そんな俺に声をかけてきたのは、その年初めてクラスが同じになった、今では無二の親友——木下柊だった。

「え？ 奏一、帰ってもお手伝いさんしかいないのか？ ってか、お手伝いさんて、なんだ？ ……まあ、いいや。暇ならみんなでサッカーしようよ！ 奏一、勉強もスポーツも得意だよな！」

人懐っこい柊はちよつとひょうきんなところがあるが、周囲をよく見ていてクラスでも人気者だった。

無愛想と言われ、どこかクラスメイトから一線を引かれていた俺だが、柊の手に導かれようやく仲間に入っていた。

俺たちは、馬が合ったのだろう。時間さえあれば一緒に過ごすようになり、気づけば放課後の交流も増えていった。

「本当に、遊びに行っているのか……？」

グラウンドや図書館など、さまざまな場所とともに過ごしたが、自宅に遊びに行くのはしばらく

経ってからだった。

この頃は気づかなかつたが、家に帰ってもつまらないと言った俺を、柊なりに気にかけてくれたのだらう。

「うん。母さんが、真夏は暑いからうちで一緒に遊んだら？ って言ってた。奏一の母さんにも、今度言っておいてくれるって。あ、でも、妹が小さいから邪魔しくくるかもしれないけど、許してやってね。楓は世界一可愛いから」

自分の妹をそんな風に言う柊は、この頃からシスコン……いや、妹思いの性格だった。

正直、人見知りで人付き合いが得意ではない俺は、妹だけではなく、柊の家族みんなに失礼のないように振舞えるか不安だった。

だが、木下家に着いた途端、それは杞憂だったと思えた。

社交性を人型にしたようなご両親に、その後ろからひよっこ顔を覗かせる小さな幼稚園の制服を着た女の子。

ぶつくりした白い頬と、人形みたいな大きくてキラキラした眼。小動物みたいで愛らしいと思った。

柊が「ただいまー」と言って、泣いて嫌がる楓を抱きしめ、キスをしようとしていたことにはドン引いた。だが、家に帰っても両親がいない環境で育った俺には、木下家の温かさは羨ましく、とても居心地よく感じた。

それからというもの、柊とご両親の提案で、俺は木下家で過ごす時間が増えた。